

## 戸田城聖の生きた時代 —戦時ジャーナリズム研究の立場から—

高崎隆治

高崎でございます(拍手)。

創価大学には、これまで七、八回講演に来ております。大体、どういう話を、どのようにすれば反応があるか、ということは分かっているつもりでおります。

ただ、何処へ行っても、私は、勝手なことばかり言いますので嫌われる、ということもあります。話の途中で突然、耳障りなことを言うかも知れませんが、その辺は、そういう性格の人間である、ということでお許し願いたいと思います。

多分、僕は、創価大学で、あまり好かれてないなあ、というふうに感じられたのは、そういうクセが出たことが一回ありました。話の途中で、「戦う意志の無い奴は、僕の話の聞かなくてもいい。出て行け」と、言った。

その時、前の方でノートを探っていた、数人の学生をヒョッと見たら、皆さん、大変、悲しそうな顔をしたので、今の言葉は取り消そうかな、と思った。しかし、言ってしまった以上、もう取り消しは出来ないということで、「いや、これは君たちだけの問題ではない。この大学の教職員も同じことだ」と、わめいたら、どうも一番後ろの方に二、三人、職員の方がおられたようで、それから嫌われたんではないか、と思っています(笑い)。それぐらい勝手なことを、何処へ行っても言いますので、なるべく気を付けるようにします。

一見、私は、若いように見えるのですが、1925年(大正14年)生まれ、年齢は75歳です。体が丈夫な理由の一つは、中学から大学の予科(現在の、大学前期の教養課程)の時まで、剣道部のレギュラーだったことにあるかも知れません。

剣道部というのは、雨が降ったから、雪が降ったから稽古は休み、というわけにはいかない。外でやる他の運動部と違って、年柄年中、稽古をしなければならない。雪が降ると喜び勇んで、わざわざ校庭に出て裸足で稽古をやる、というちょっと気違いじみたところ

がありました。そのお陰で体力があるらしく、十歳ぐらい若く見られるのではないかな、とっております。

### 時代背景とは切り離せない文学作品

私は、戦争末期の学徒兵の生き残り、と言うよりも、正確には“死に損ない”と言った方がいかも知れません。

軍隊というのは軍隊ではなく、“軍”という字にしんにゅうが付くところの“ウンタイ”だという説があります。“運”が良かったということで、今日まで生き延びることになったとっております。

ただ、一つだけ申し上げますと、戦争中、学徒には特権があったんです。つまり、特別操縦見習士官に志願をすれば、最初から金筋一本に星が三つという見習士官になる。特甲幹に志願すれば、いきなり伍長の金筋一本に星が一個の下士官になれる。

だから、僕らの仲間は、ほとんどが特甲幹なり、特操なり、あるいは海軍予備学生などに志願しました。しかし、私は、最後の最後まで、信ずるところがありまして、志願をしませんでした。志願をした連中は、大体、戦死してしまっただ。

死ぬのが怖かったのか、と言うと、それはもう怖いに決まっている。決まっているけれども、殺されるのはイヤだが、殺すのはもっとイヤだ、と、思って志願をいたしませんでした。

ところが、軍隊というところは酷い所で、入ったらトタンに、中隊長に呼ばれて、「貴様は、剣道の選手でありながら、何故、志願をしないか！」

と、怒られました。

そう言われるだろう、とあらかじめ考えていましたから、答えを用意していたんです。志願をすれば、下級ではあるけれども将校になる。将校になれば、歩兵の場合は、百人ぐらいの部下を持つようになるんです。そこで、

「僕は、部下に向かって、命令をする自信がありません。間違った命令を下した時に、僕の命令によって、大勢の部下を殺すことになるかも知れない。そういう自信が無いから、志願をしませんでした」

と、言ったトタンに、

「バカモノっ！」

と、殴られました。

「お前に、自信があるかないか、などということは、どうでもいいんだ。ただ、お前が

適任であるかないかということは、お前が決めることではない。軍隊が決めることである」  
と言って、また、三つか四つぶん殴られた。

一緒に入隊した学生の中で、殴られたのは僕一人なんですね。志願しなかった人も、他の大学の学生ですが、何人かいました。しかし、彼らは、運動選手でなかったために、殴られませんでした。

僕は、運動部の中でも“最右翼”の剣道部です。今の剣道とちがって人を殺す練習ばかりやっているわけですから。運動部の選手だった、ということが致命傷になって、酷い目に遭いました。もう一つ他に理由がありましたがそれは省略します。

ところで、僕は、文学部の国文科出身で、近代文学を勉強してきた。ところが、文芸評論家とは言われなくて、何時の間にやら、“戦時下のジャーナリズムの研究者”とよばれるようになってしまった。

何で、そうなったのか。

今、日本文学の研究者の中には、それほど際立った学問上の流派というものは無いと思います。しかし、僕が学生の頃、戦中、あるいは戦争直後の頃ですが、日本文学の研究には色々な学派がありました。

僕の先生は、実は、「歴史社会学派」という派を作っていた。これを説明するには時間が掛かりますが、簡単に言いますと、ある文学作品を評価する場合に、それが成り立ったところの歴史的な背景、社会的な状況というものを抜きにしては出来ない。これが、「歴史社会学派」の一番中心になる考え方なんです。

ところが、この「歴史社会学派」と、鋭く対立する「日本文芸学派」というのがありました。当時の東北帝大、今の東北大学に岡崎義恵という先生がいらして、この「日本文芸学派」と「歴史社会学派」とは、物凄い論争をやります。

これは文学史の中では、「国文学論争」と言われる大論争なのですが、最終的には、「歴史社会学派」は、社会主義者ないしは社会主義に近い“自由主義”である、というようなことを言われまして、私の先生たちは職を失い、ある人は中国へ渡って、中国の師範大学などで教鞭をとったり、ある人は獄に繋がれたり、という結果になりました。ですから、文学作品を研究する場合、作品とその時代と切り離すことは出来ないというのが、僕らにとって大原則なんですね。

朝鮮戦争を機に、「十五年戦争」を問い直す

私の卒業論文は、「シベリア出兵における反戦文学」というテーマでした。立野信之や

黒島伝治といった人たちが、いわゆる“反戦”に関わる作品を残しています。黒島の名前などは、ご存じないかも知れませんが、岩波文庫に『渦巻ける鳥の群』という薄い小説が入っていて、これが黒島伝治の代表作です。これなども、時代の背景が分からないと、作品そのものを理解することは出来ないでしょう。

ともあれ、僕は、“シベリア出兵”に関する反戦文学を、卒業論文に書きました。その後、学校を出ましてから、横浜のミッションスクールで国語の教員をやっていました。それから間もなく、1950年(昭和25年)6月になって、朝鮮戦争が起こったのです。当時、私は、まだ二十代であり、

(ひょっとすると、これは危ないのではないか。もう一度、若者たちを軍隊に引っ張るんではないか……)

というような恐怖を感じました。

太平洋戦争は、五年ほど前に終わったばかりです。それなのに、また、新たな戦争に巻き込まれようとしているわけです。

待てよ、と思いました。あの戦争は、一体、何であったのか、振り返る必要がありはしないか。戦争に対する、自分の態度、考え方を、きちんとしておかないと、これは大変なことになるかも知れない、という危惧を抱きました。そのことがあって、“シベリア出兵の反戦文学”から、「十五年戦争」に関わる戦争文学に研究テーマを切り替えたのです。

「十五年戦争」下の戦争文学ということになると、真っ先に問題になるのは、石川達三という作家です。彼は、第一回の「芥川賞」作家です。日中全面戦争が起こったのは、1937年(昭和12年)7月7日のことで、12月には「南京攻略戦」が始まるわけですが、彼は『中央公論』の特派員として従軍しています。

その時、中国の地で兵隊から聞いた話、自分が見たこと、それを基に書いたのが「生きてゐる兵隊」という作品です。これを『中央公論』の1938年3月号に載せた。ところが、たちまち発売禁止になった。

検閲に当たった軍当局は、何と言ったか。「虚構の事実を、あたかも事実であるかのように書いた」と言って、石川達三は“禁固四ヶ月、執行猶予三年”という結果になるのです。しかし、愚かな裁判官がいると思って、僕は、呆れかえらざるを得ない。小説というものは、“虚構”を何処まで事実のように書けるか、ということを目にしているわけですよ。事実百パーセントの小説などというものはあり得ない。何処かに“虚構”があるんです。それがダメというならば、日本に小説家など一人もいなくなる。冗談ではない、と僕は思うわけです。

その頃、僕は子供でしたが、新聞を見ると「“生きてゐる兵隊”事件」などと出ている。

これは一体、何だろうな、と思っていました。今日、「十五年戦争」下の戦争文学を語る以上、これを問題にしなければならないわけです。

石川は、「南京攻略戦」に従軍して、「生きてゐる兵隊」を書いた。ところが、今でも、あの「南京事件」そのものが嘘である、とか、あれは幻である、と言う連中がいる。僕は、冗談を言っただけではない、あれは決してデマなどではない、と言いつづけているのです。

戦争中、あれだけ検閲の厳しかった時代であっても、中国で日本軍は、どうやら酷いことをやっているのではないかと、思わせるような従軍記は、石川以外にいくつもあるんです。その中で、「生きてゐる兵隊」が何故、狙われたのか、と言えば、彼が、第一回の「芥川賞」作家だったことが、理由の一つに挙げられるでしょう。

当時の事件にふれる作品は他の人間も書いています。佐々木元勝という方がいます。この人は兵隊ではありません。東大法科出身で、通信省の野戦郵便長という軍属なんです。この人が『野戦郵便旗』という本を、昭和15年に出版しているわけです。それを見ますと、前後に伏字がありますけれども、これは、大変なことだ、何千、何万という中国人、もちろん中国兵が大部分なんだろうが、日本軍が殺しているなあ、ということが分かるわけです。

僕は、中学生の時に、本屋の店頭で、この本を読みました。二、三十ページ読んで帰る。翌日、また行って、と四、五回それを繰り返して、全部読んでしまった。その後、やはりあの本は、もう少し丁寧に読んだ方がよい、と思い、小遣いを貯めて買いに行ったら、もう売っていなかったのです。

西条八十という有名な詩人がおりますが、彼も「南京攻略戦」に従軍して、『蠟人形』という雑誌に、「南京攻略戦」の従軍記を連載している。それを見ても、これは、大変だ、と思わせる描写があります。攻略戦が終わり、南京城内への入場式が行なわれるのに、死体の山を片付けようがない。そこで高い塀を巡らせた。その内側には、それこそ、中国人の死体が山のように積み重ねられている、ということ、戦争中に書いているんです。

ですから、「南京事件」を推測させるような作品は、すでに戦争中に発表された作品にある。日本人は知らないフリをしているだけだ、という趣旨を、僕が朝日新聞記者に話した。それを切っ掛けにして、今から二十五年前に、「朝日」の本多勝一、徳間書店の和多田進、早稲田大学の史学科の先生の洞富雄、それと私の四人で「南京事件調査研究会」というのを作りました。

十年間ほど、会合場所を転々とさせながら、研究会を持ち続けました。右翼から狙われていましたから、本多氏などは二年間、家に帰ることが出来なかった。本多の家の前には何時でも、右翼の車が止まっていた。そんな中で、調査・研究を進めたわけで、僕ら

は「南京事件は事実である」と言うことを、止めるわけにはいかないのです。

論争の相手は、『「南京大虐殺」のまぼろし』などと書いた鈴木明であるとか、もう亡くなりましたけれども、山本七平などがいます。ご存知のように、山本は、別名をイザヤ・ベンダサンと言います。『ユダヤ人と日本人』という本を書いて、それはベストセラーになったので有名ですけれども、イザヤ・ベンダサン＝山本七平でありまして、あの本はユダヤ人が書いた、などと思ったら、とんでもない間違いです。

そうした連中が、しきりに挑戦をしてくる。受けて立たなければいけない。それを十年間ほど繰り返していたわけですね。

四人で十年間、それをやっておりました。そして、今から十五年前に、どうやら勝負が決まった、我々が、勝ったようだ、ということから、非公式だった“調査研究会”を広げよう、ということで、十数人の仲間を新たに加えました。

「朝日新聞」がその時、「南京事件調査研究会」が出来た、と報じて、メンバーの名前を載せていましたけれども、実際には、それまでの十年間に、わずか四人でやってきた歴史があったのです。

#### 「南京事件」の真相究明のために雑誌を渉猟

「南京事件」については、あんなものはデッチ上げである、幻である、という説がいまも根強くあります。

仮に、もし、あれが虚構であったり、誇張であったりすれば、「歴史社会学派」の立場からして、石川達三の「生きてある兵隊」に対する評価も、当然、変わってこなければならぬわけです。しかし、あれはどうしても、デッチ上げとは思えない。むろん作品自体は、フィクションではあろうけれども、「南京事件」の真実の一部を描き出していることは間違いない。

そのことを裏付けるために、僕は、色々な戦争中の雑誌や新聞、単行本を調べ上げたんです。論争自体は今も続いているわけですが、そういうことをやっているうちに、僕は重大な問題に気が付いた。それは、戦争末期になるに従って、用紙事情、印刷事情が悪化していきます。そのため、雑誌などに載せた随筆なり、小説なり、それは何でもいいのですが、戦争を主題とする作品の多くは雑誌に載せっぱなしで終わることになるのです。普通ならば、それらを何篇か集めて、一冊の単行本として出て来るはずなんです。

ことに、昭和十八年以降は、そういう形の出版は減ります。雑誌に書いたものは、そのまま載せっぱなしで、単行本化されなくなる。単行本になる機会がなくなるわけですから、

戦争文学を研究しようと思えば、当時の雑誌を見なければならぬし、集めなければならぬ、ということになるんです。

私が、そう言いますと、国会図書館にでも行ったら、簡単に分かるのに、と思われるかも知れません。しかし、国会図書館ではまるで用が足りません。僕のところにまで、今まで何回か、国会図書館から「昭和何年頃、こういう雑誌があると思いますが、何年ぐらいまで出ていましたか？」なんて聞いてくることがあった。

僕は腹が立って、

「冗談じゃない。僕は、誰からも援助も補助も受けていない。国会図書館は国の予算で運営されている。僕が、国会図書館に物を聞くのなら、それは当たり前かも知れないけれども、何で、国会図書館が僕に聞いて来るんだ。そんなことは知っていても、返事なんか出来るか」

と言って、何回か喧嘩した。そのように、国会図書館に無い雑誌というのは、実は、無数にあるということなんです。

そのために、僕は、古本屋の即売会などに、しばしば足を運びました。高校の教員をやっている頃のことですが、修学旅行で九州や四国、あるいは北海道などに行きます。旅館に着いて、「よーし、解散。門限は何時まで」と言う。そして、僕はそのまま、旅館の番頭さんに、「この付近に古本屋ありませんか？」と聞いて、行ってしまふ。

修学旅行から帰り、女房がお土産だと思って開けたら古本ばかり。女房に怒られちゃって、一週間ぐらい口をきいてもらえなかった、ということもありました(笑い)。そういう思いで戦中の雑誌を集めたわけです。その結果、大体、戦時下の戦争文学というものは、どういうものであるか、おおよその見当はついたのですが、そうした過程で、実は、『小学生日本』という雑誌にぶつかったのです。

### 時局に抵抗した戸田城外の『小学生日本』

先ほど、僕は、文学作品の研究に当たっては、その作品が成立した時代の状況、社会の状況、そういうものを抜きにして作品の評価は出来ない、と言いました。

戸田城外が編集・発行の『小学生日本』を調べることは、原理的に文学作品を調べると同じことなんです。

つまり、その『小学生日本』という雑誌が、どのくらいの価値があるのか。どういうところが長所であり、どういうところが欠点と思われるか、ということを考えるためには、その時代が分からなければ、どうしようもない、ということなんです。

創価学会の青年部に招かれて講演などに行きますと、質問が出ます。

「牧口先生や戸田先生の書かれたものを、ほんの一部だが読んでみると、何でこんな遠回しに言うのか、もっとズバリと、何で言えないのか。そういう感想を持たざるを得ない。このことについては、どうなのでしょうか」

と。

そういう質問に対して、簡単に言いますと、戦争中の行動あるいは思考などは一見、“五十歩百歩”のように見えるものは無数にあるんです。しかし、戦争中の“五十歩”と“百歩”というのは、天と地の違いがあります。

ある部分では、これは妥協してもいいだろう。しかし、この問題は、妥協は出来ない、ということ、雑誌の編集者は考えながら作らざるを得ない。つまり、全面的に戦争を拒否したり、批判をした、となれば、雑誌の発行自体が一回と保たない。

『中央公論』のような大雑誌ですら、石川達三の小説一篇で“発売禁止”になるぐらいです。一回だけでも雑誌の発売禁止を食ったら、小さな出版社ならたちまち倒産します。『中央公論』だったから、倒れなかっただけの話ですね。発禁になったら、会社が倒れてしまう。だから、ある部分の妥協やむなし、ということは、誰でも考えないわけにはいかない。

この『小学生日本』という雑誌も、発禁になることは困るし、第一、出版社として、用紙の配給が停止されては困る、それを考えれば、もっと戦争に協力的でなければならなかったはず。しかし、この『小学生日本』は、当時の少年少女雑誌としては、最もこの時代に妥協しなかった雑誌であろうということが分かってきました。

それは同時代の雑誌と比べれば歴然としています。子どもの雑誌には、講談社の『少年倶楽部』、小学館には『小学一年生』、『二年生』、『三年生』、『四年生』、『五年生』、『六年生』などがあります。これは後に、『少国民の友』と改題されます。

あるいは講談社の『少女倶楽部』、また、少し時期は外れますが、『小学生日本』と入れ替わるように出版された、「朝日新聞社」の『週刊少国民』という子供向けの雑誌もあります。

それらのどれと比べても、『小学生日本』は、当時の戦争から最も遠く距離を置いている。僕は、『小学生日本』を十冊くらいしか収集しておりませんが、そういうことははっきり分かります。

## 用紙事情悪化の中で新雑誌を創刊

その証明として、『小学生日本』（五年生用）の創刊号の主要な目次を見てみたい。

報国美談・輝く陸戦隊の華（高瀬五郎）  
スパイ小説・南海の熱風（茂野幽考）  
畑俊六大将の兄弟愛物語（川中三省）  
少年少女小説・明日への道（塩田恵子）  
ユーモア小説・知ちゃん（安野茂）  
漫画・感蛙博士と飛男君（吉本三平）  
五少年の世界一周（沖野岩三郎）  
時代小説・風雲天狗連（北野兵助）  
明るい勉強室・国語、算術、理科、国史など

目次だけでは、中身は分からないかも知れません。

しかし、私が読んだところでは、時局向きの記事というのは、初めの三つですね。この三篇だけが時局向きになっています。

ところが、あとは少年少女小説、ユーモア小説、漫画が並んでいます。「感蛙」という字は「考える」と、読むのだと思います。それから、「五少年の世界一周」、「時代小説」と続けてみると、初めの三篇を除けば、あとの全てに戦争の匂いが全くない。そういう内容なんです。

そういうものを、この時代に雑誌に載せるというのは、よほど覚悟がなければ載せられないんです。初めの三篇の時局向きの記事と、小説その他平和的な記事を載せることで、うまく検閲をくぐり抜けるという方法で、創刊号を作ったと考えられるわけですね。

ところが、時局に合わせた最初の三つは、実質的には、非常に短いんです。大変に短い。これは飾りとか、あるいは“枕”といった感じで載せたものと考えられます。それに比べて、後の方はそれぞれが、かなりの長さを持った文章となっています。特に、「五少年の世界一周」を書いた沖野岩三郎という人は有名な作家で、全体の中で編集者が一番大事にしているのはこの文章だな、とすぐ分かるような旅行記になっているのです。

ところで、この当時、雑誌を創刊するなどということは、非常に難しかった。昭和十六年版の『雑誌年鑑』には、次ぎのように書かれています。

「当局は、まづ原則として、創刊雑誌を認めず、また既刊の定期刊行物においても不急

の物ないし同一性質のものはどしどし淘汰し(略)十五年(昭和)に至るや、当局は更に統制を強化する目的の下に、従来とつてみた範囲を拡張し、類似雑誌の淘汰に乗出した」と、こうあります。

戸田城外はこの時に雑誌を創刊するのです。したがって、初めの三篇、時局向けの記事を書けないわけにはいかない。これがなければ、創刊は認められない。しかも、初めの「報国美談・輝く陸戦隊の華」の執筆者、高瀬五郎という人は、内閣に直属する「用紙統制委員会」のメンバーの一人なんです。彼は、階級は海軍少佐なんですね。要するに、出版にかかわる海軍の代表です。その彼に、執筆を依頼し、それをまた、巻頭に載せるということで、この雑誌の創刊を認めさせたと思います。この辺は、相当に考えたやり方だと思います。

その証拠に、二号、三号、四号と次々と出していく過程で、だんだん時局向きの記事が無くなっていく。四冊目辺りになると何も無くなる。この辺が、戸田城外の本当の心、抵抗精神の表われではなかったかと思えます。

しかし、こういうことを言うと、妙な批判をする人がいる。戸田城外は戦争中に、軍部に抵抗していた、と言うが、何だ、高瀬五郎などという海軍省軍事普及部の将校に物を書かせたり、畑俊六などという、それこそ「南京攻略戦」で悪名高い陸軍大将などの、伝記をのせている。少しも平和志向の編集などしていないではないか、などと短絡的に言う人がいるわけです。

ところが、それは、とんでもない間違いです。創刊号一つを見ても、極端に言えば、命懸けです。下手をすると、ちょっと来い、で、何時、監獄から出してもらえるか分からないような状態になりかねない。そればかりか、二号、三号と進むに従って、次第に、旗印が鮮明になってくる。そのことと当時の時代背景を見ずして、軍部に協力しているではないか、とか、もっと反戦の旗印を高く掲げるべきだ、などと知識人が言っているようでは、どうしようもない。

かつて、学生運動が盛んだった時があります。それは、僕の尊敬する思想家、丸山真男が、教壇を退くような事態にもなっています。そういう時代に、僕などもある場所でシンポジウムがありまして、日高六郎と一緒に招かれたことがあります。ほとんどが学生でありましたが、彼らの前で話をしました。その時、僕など小者だから、あまり非難されることはなかったのですが、日高さんは、物凄く学生から批判されました。

僕は、どう言われたか。「あなたは、何故、銃を取ったか」と言う。僕は、

「馬鹿を言うてはいけない。銃を取ったかではない。何故、あなたは銃を取らされたのかと、こういうふうにするべきだ。僕は、学徒の特権は全て放棄した。だから、最後まで、

ただの兵隊であって将校ではない。これが、僕の出来る精一杯の抵抗なんだ。これ以上のことを、あなた方が言うのなら、それは、この国に何故、あなたは男として生まれたのか、と問うことと同じである。何故、おまえはこの国に生まれたのか、なぜ男に生まれたのか、と言われたって、どう仕様もないではないか。何故、銃を取ったか、という質問に対しては、これ以上僕は答えを知らない」

そう言ったら、僕に対する批判は無くなりました。しかし、学生運動の闘士が、そんなことを言っているようでは話にならんと思うんです。それと同じことで、戸田城外は命を賭けて、必死になって戦っていたことが見えないのでは仕様がな。しかし、それを見ようとしても、その時代を知らなければ何も見えてこない、ということなんです。

### 「サクラ読本」世代に、新しい視野を

戸田城外の年譜などを見ますと、創価教育学会が創立されたのは、昭和5年(1930年)の11月だと書かれております。

昭和5年と言いますと、まだ、僕は、小学校に上がる前です。僕は、昭和7年の4月に小学校一年に上がったわけですから、小学校に上がる前の状況というのは、どんなことがあったのか、具体的に詳しくは知りません。しかし、創価教育学会が出来た前後の、幾つかの出来事だけは覚えているんです。

例えば、チャップリンが日本に来た。彼は、超特急「つばめ」に乗って、西の方から東京に向かって来た。当時、僕は、横浜駅の構内に住んでおりました。構内に住んでいた、と言っても“捨て子”ではなくて(笑い)、僕の親父は国鉄の職員だったので、駅の官舎に住んでいましたから、目の前が駅のホームだったのです。

あるいは、頭の上を、ドイツの飛行船ツエッペリンが通った、というようなことは覚えていますが、この創価教育学会の出来た翌年の、1931年9月18日には、「満州事変」が起きているわけです。

その時、僕は、横浜駅の改札に、母親に連れられて立ちました。母親が一生懸命、改札を通る女性にお願いし、戦場での無事を祈る“千人針”を縫ってもらうんです。僕は、その側で、冬でありましたけれども、夕方から夜に掛けて二時間ぐらい、寒い思いをして立っていた。と言うのは、親父はシベリア出兵の現役兵で、当時、もう現役を終わり、予備役を終わり、後備役だったわけですが、“足止め”が連隊区司令部から来たわけです。

“足止め”というのは、旅行してはならない、もし、どうしても宿泊を伴う旅行をしなければならぬ場合は、連隊区司令部にあらかじめ届けよ、という命令です。その“足止

め”が来たら、明日、召集令が来るかも知れない、という状況だったんです。

戦争は満州、今の中国の東北部で始まりますが、翌昭和7年の1月には、満州だけに止まらず、上海にまで飛び火します。そのような状況の中で、僕は、小学校に入学しました。上海で“停戦協定”が結ばれたのは5月ですから、その一ヶ月前の4月のことでした。

何で、そんな話をするかというと、そのことと戸田城外が発行した『小学生日本』は、物凄く関係があるからです。切っても切れない関係がある。どういうことか、と言いますと、昭和7年に小学校に入学した子供たちは、旧制度の古い教科書で学んだ最後の学年です。国語を例に採りますと、翌昭和8年から登場する、いわゆる「サクラ読本」で教育された者と、丸っきり違うのです。

ハナ、ハト、マメ、マス、  
ミノ、カサ、カラカサ、カラスガキマス、  
スズメガキマス

これは、僕ら、昭和7年入学の一年生が学んだ、巻一の国語の教科書の最初の部分です。これは、単語から学び始めます。

「ハナ、ハト、マメ、マス、ミノ、カサ、カラカサ」という、単語からです。しかも、自分たちの日常の周辺に見られる物から勉強をする。そこから国語を始めるわけです。“ミノ”ってわかりますか？ 雨具のことですね。傘と言えば、僕ら小学校の時に、コウモリ傘など持っている者はいないんですよ。だから、「カラカサ」なんです。

ところが、翌年の昭和8年から学んだ子供たちは、いわゆる俗に「サクラ読本」と言われる教科書で勉強を開始した。そういう時代なんです。

昭和8年入学と言うのは、大正15年の4月2日から、昭和元年、この年は一週間しかありませんが、元年を挟んで、昭和2年の4月1日までに生まれた人たちです。この人たちから、この「サクラ読本」で学んでいるんです。

これは以前の国語教科書とまるで違います。いきなり短いけれども、センテンスで始まる。

サイタ、サイタ、サクラガ、サイタ  
コイ、コイ、シロコイ  
ススメ、ススメ、ヘイタイススメ

驚いたことに、これは命令調なんですよ。

「コイ、コイ、シロコイ」の「シロ」というのは、犬の名前ですね。愛犬かどうか知りませんが、犬に向かって「コイ、コイ、シロコイ」と言っている。男の子も女の子も。何で女の子が、「コイ」なんて犬に言うんですか。「オイデ」と何で言わないんですか。こういうところから一年生の勉強が始まります。その次ぎには、「ススメ、ススメ、ヘイタイススメ」と、もう兵隊が出てきて、しかも、これは命令なんです。

こういう軍国調の教科書は、一年、二年、三年、四年とだんだん酷くなっていきます。「古事記」「日本書紀」も出てきます。あれは神話であるにもかかわらず、あたかも歴史的な事実であるかのように教える。神話というものは、あくまでも神話として教えるべきなんです。事実、僕らの世代は、そうは教わりませんでした。

僕は、神話は神話だ、という風に教わりました。ところが、僕の弟は、二つ歳下ですけども、そのことで対立しました。そんなものは物語だよ、と僕が言うと、冗談じゃない事実だ、と毎日のように兄弟喧嘩をしたもんです。四国や九州に縄を付けて、引っ張って来て国を造ったんだ、と言って聞かない。

そういう状況の中で、戸田城外は、昭和15年1月に、五年生用の雑誌『小学生日本』を発行した。どんなに難しかったろうか、という風に思います。この年の4月に六年生になる子供たち、それは間違いなく、この「サクラ読本」世代の子供たちなんです。

私などは、「十五年戦争」が始まる以前は、子供ではありましたが、チャップリンがやって来たりして、一時ですけども、楽しい時代があった。少なくとも、そういうことを知っている者を読者として雑誌を作るのなら、編集・発行はもう少し易しかったらと思います。

ところが、軍国少年たちが育っている、その最中に、彼らに良心的な雑誌を読ませるといことは、大変な困難があっただろう、と僕は思うんです。僕なんかとは違うから、戸田城外のような立派な人は、絶望などしないだろう、と思うのですが。

僕は、創価学会員は偉いなあと思うことが一つある。何が偉いか、と言うと、どんな困難な状況でも、絶対に絶望しない。僕など直ぐ、絶望してしまうので、到底、これは真似出来ないと思っています。戸田城外も、どんなにか困難であっただろうか、などと推測出来るわけですよ。

つまり、この『小学生日本』の中身を検討するということが重要なことなんです、戸田城外は誰に向かって、誰に読ませようとして、この雑誌を作ったか、ということを考えてないと、本当のところは分からないだろうと思います。

## 『小国民日本』の命名に見る戸田城外の気概

やがて、翌昭和16年の4月から“小学校”が無くなって、「国民学校」になります。だから“小学生”はいなくなる。小学生は何になったか。“少国民”と呼ばれるようになります。漢字の書き取りの時間に、「はい、しょう国民と書きなさい」と言われ、“少”と“小”のどちらが×で、どれが○か。文部省が決めたのは“少”です。数が少ないのと、若いという意味があるのですが、若い国民、ということで、“少”が○です。国語のテストで“小”と書いたら×なんです。

ところが、戸田城外という人物は偉いなあ、と思うのは、文部省とは違う『小国民日本』という雑誌を出しているわけですね。

“少国民”ではなく“小国民”、つまり、文部省が目的としている子供たちと、自分が育てようとしている子供たちとは違うのだ、と言っているわけです。これでは、当局から睨まれないわけがない。こんなことを文章で書いたら、一遍に手が後ろに回ってしまいます。よほど勇気がなければ、よほど信念が無ければ、これは出来ない。

僕だったら怖くて、文部省が「少」という字を使っているんだから、こっちにしようとしたでしょう。子供たちや学校の先生たちから、この雑誌の字は間違ってるのではありませんか、などと言って来たら、どうしようと考えるんですが、断固として、彼は最後までこれを貫いたわけです。

太平洋戦争が始まったのは、昭和16年12月8日ですけれども、翌年の4月にこの『小国民日本』は廃刊になっている。どういう理由で廃刊になったかは、よく知りません。その最後の号を、僕は見ておりません。「見た」という人間にも、出会ったことがありません。

廃刊になった理由の一つは、その翌月の5月に、前にも申しましたが、「朝日新聞」が『週刊少国民』という子供向けの雑誌を出していることと関係があるかも知れません。用紙事情が逼迫していますから、それを出すために「朝日」が何か細工をしたのかも知れない、と僕は思っています。

何か「朝日」の悪口を言うようですが、あの新聞社は問題が少なくない。例えば、終戦直後に、アメリカの科学者が書いた原子爆弾についての論文を、活版印刷の単行本にしてしまったことがあります。新聞社ですから、活版の本を作るのは簡単です。少数数を社内用として作ったので、外部に持ち出してはいかん、と書いてあります。何故なら、これはアメリカの科学者の論文を内緒で翻訳したもので、著者の了解は得ていないから、外部に知られないようにしろ、などと注意書きをつけて平気で出してしまう。

「朝日」というのは、私の友人の本多勝一が長い間務めた新聞社ですから、あまり悪口

は言いたくないけれども、どうも自社の『週刊少国民』を出すために、当局を突つつけたことが、『小国民日本』の廃刊に繋がったのかも知れない。

もう一つ考えられる理由は、戸田城外が自ら廃刊を決意したのかも知れない。と言うのは、太平洋戦争が始まって半年が経っている。当初、日本軍は、「連戦、連勝」という格好になるわけです。これは当たり前です。不意打ちを食らわせれば、「連戦、連勝」になります。日本の軍部は有頂天になっていた時代なんですね。そういう状況の中にあっては、もう、これ以上、今までの調子で雑誌は出せない、と判断したのかも知れない。編集方針を転換して、軍部べったり、国家権力の言うままの雑誌を出さなければならなくなるだろう。そういう百パーセント迎合の雑誌は出さない、という決意を持って自ら廃刊にしたのではないか、という推測も、この「小国民日本」というタイトルから充分に考えられるわけです。

そこのところは、断定はしません。あるいは、睨まれ続けた拳句に、もう大概にしろ、と当局に言われて、残念ながら引き下がった、というのが真実かも知れません。しかし、僕に言わせると、よくこんなギリギリまで頑張り続けた、と思います。

皆さんには、聞き苦しいことを言わなくてはなりません、「牧口先生は偉い」とか、「戸田先生は偉い」と、よく創価学会の方々と言われるわけです。それは、そうに違いないけれども、ただ、「戦後、いち早く、牧口先生の意志を継いで、戸田先生は、創価学会を再建し、発展させた、だから偉い」という認識だけでは、本当の戸田城外の偉さというのは分からない、と僕は思うんです。

あの戦争中、悪戦苦闘して、ギリギリ一杯のところまで抵抗しながら、雑誌を発行し続けた。その拳句の果てに、昭和18年の夏、牧口先生と一緒に検挙されてしまう。悪戦苦闘しながら、しかも、不退転の決意の下に、獄に繋がれても戦うんだ、と言って戦い抜く。それは当時の時代状況を正確に把握しないと、そのような本当の偉さは分かってはこないのではないか。僕は、そう思うんです。

### 牧口、戸田の精神を深い所で掴め

戦後、戸田城外がやった仕事、あるいは言論、そういうものはたくさんあります。

もう時間がないから、詳しくは申し上げられませんが、それは大きな影響を社会に与えてきた。

僕は大学を出て、横浜の高校で教員をやっていた。その時に、社会科の教員が学園祭の折り、原爆とは何だ、水爆とは何だ、とその禁止を訴える展示を、一つの教室を使ってや

った。とたんに、校長から、「あの部分は、批判的である。あの模造紙一枚分外せ」と言われた。そうしなければ、原水爆に関する展示は取り止めにする、と言われて、彼は抵抗したものの、最終的には、外さざるを得なかった。それから数年間、僕は彼と一緒にいたのですが、最後まで学校の幹部から狙われていた。

そういう時に、たまたま直ぐ隣の、横浜の三ツ沢グラウンドで、創価学会の戸田城聖という会長が、「原水爆禁止」について大宣言をやったというのを聞きました。同じ横浜ですから直ぐ伝わって来たわけです。

その時に、僕は、「ああ、これで、もう少し大きな声で、学校の中でも、物が言えるようになったなあ」という風を感じたことを覚えています。今でも言論というものは、かなり不自由ですけども、簡単に、今のようない時代が来たわけではありません。

こんなこともありました。僕は、国語教師ですから、漢文を週に一回、教えます。その時に、白楽天は偉い、杜甫も偉い、と生徒に話したら、たちまち校長室に呼び出された。「君はケシカラン。中国の文学者をやたらと褒めたたえているというではないか」と言われた。

僕は、開き直って、「白楽天や杜甫の何処が悪いんだ。誉める以外にないじゃないか。これは僕の意見ではない。大学で教わった僕の先生の意見である。もし、僕のやり方がダメだと言うのなら、あなたが来週の漢文の時間に、僕の代わりに、白楽天を教えてくれ。僕は生徒と一緒に授業を受ける。もし、僕の教え方が間違っていると思ったら、僕は即座に、教員免許証を文部省に返しに行く」と言いました。

僕の教員免許というのは、旧制高校の免許証なんです。発行は教育委員会ではなく文部省ですから、文部省に返しに行く、と言ったのです。つまり“文部省に返しに行く”というのは、教員を辞める、という意味です。そう言ったら、今度は、「昔のことはいいとしても、ごく最近の、いまの中国の指導者を偉い、と言って誉めたそうじゃないか」と攻められた。

僕は、何を誉めたかと言うと、戦争が終わった時に、中国の指導者は、「暴を以って暴に報いるなかれ」と言った。中国人が日本から暴力でさんざん酷い目に遭ったのだから、戦争が終わった今、日本人を暴力で痛め付けてやる、というのはいけない。そこで「暴に暴を以って報いるなかれ」と言ったわけです。しかし、僕は、中国の指導者は偉い、と誉めたものの、誰々とは具体的には言わなかった。

すると、校長は「君は、中国の指導者、毛沢東は偉い、と言ったそうじゃないか」「そんなことを言った覚えはない」「じゃあ、周恩来か」「いや、周恩来とも言わない」と押し問答です。拳句の果てに、「何だ、その暴に暴をなんとか、というのは」と言うから、「そ

これは台湾の代表である、蒋介石の言葉である」と言ったものの、待てよ、これは、ひょっとしたら、周恩来かも知らんなあ、と思ったけれども、校長もよく知らんだろうから、「蒋介石を誉めて何処が悪いんです」と開き直った。結局、クビにならなかったものの、そういう状況が、民主主義になったという戦後にもたくさんあるわけです。突然、言論の自由の時代になったわけではないのです。

学徒でありながら、最後まで志願をしなかった戦争下の僕の立場からみると、戦争中の戸田城外の力の限りの時局への抵抗ぶりが、よく分かるんです。

ですから、牧口先生や戸田先生の書かれた物を、字面だけ見て偉いなんて思ったりしたら、これはむしろ侮辱になるのではないかと僕は思う。本当の偉さというのは、時代との関わりの中で、如何に、戦ったかということを知ることによって理解されると思います。

そんなことで、日本近代文学を勉強する私が、どうして“戦時下のジャーナリズム”に関心を持つようになったか、ということをお話したわけですが、もし、機会がありましたら、もう一回、この続きをやりたいと思います（拍手）。

どうも、雑駁な話で申し訳ありませんでした。

本日は、大変、ありがとうございました（拍手）。

時間の関係で多くの問題について省略しました。その中の一つを追補という形で述べさせていただきます。

それは、小学校一年生用の国語の旧教科書ですが、経験的に言いますと、教師はまず読みを教え、つぎに「花はみんな綺麗です」と言い、「いま咲いている桜のほかにどんな花がありますか」と問います。すると児童は、つい最近見たばかりの梅とか桃とか答えます。教師は「他にどんな花があるか」と尋ね、すみれ、たんぽぽなどの答えを引き出します。むろん、入学後の最初の国語の時間です。そういう教室風景をいまに私が鮮明に記憶しているのは、「他に」と問われた時、母親に買ってもらった絵本にあったデージーとアネモネの名をあげたからです。「外国の花もたくさんありますね」と言った担任の女性教師の笑顔をいまも私は思い浮かべることができます。

たぶん、これは教師用指導書のようなものにある基本的な教え方ではないかと思いますが、重要なことは、花を桜に限定しないで、広い視野で花はすべて綺麗だと教える点で、サクラ読本との根本的な相違はそれだけでも理解されると思います。

ちなみに、私の通っていた小学校は、横浜市のモデルスクールであった青木という学校です。

ついでにもう一つ、「朝日新聞」に対する批判のところ、書名を具体的に述べませんでしたが、これはたんなる中傷と受けとられるおそれがありますので、書名をはっきりさせておきます。

本のタイトルは『原子力の軍事的利用』で、著者はプリンストン大学のH・D・スミス教授です。冒頭の一節には「翻訳や出版に関する手続きはなにもとっていないものだから、決して社外の人目にふれることのないように十分に注意していただきたい。特に公表する新聞、雑誌、図書その他あらゆる文書に、この内容の一部分でも引用することは絶対にいけないばかりでなく、他人によって引用されるおそれもないように十分に注意していただきたい」と記されています。

発行は昭和23年11月1日、B 6判・二段組み・173頁。